

「いのちの種」の成長のために

— 会長就任のご挨拶

ペシャワール会会長

原 祐一

このたび、ペシャワール会の会長に就任いたしました原祐一です。私は中村哲先生の九州大学精神科の後輩にあたります。中村先生はかつて大牟田労災病院に勤務されており、私はその二〇年後、同じ病院で同じ患者さんを診ていました。私が医師になってまだ二年目の一九九五年のことです。その頃は、先生のことを直接存じ上げていたわけではなく、「パキスタンやアフガニスタンで医療活動をしている九大の先輩がいる」と耳にしていた程度でした。両親からペシャワール会の話聞くこともありましたが、当時の私は「世の中には献身的な方がいるものだ」と思うくらいで、その志の大きさを深く理解してはいませんでした。

しかしその後、村上先生や福元さん（当時の事務局長）をはじめとするペシャワール会の方々のご縁をいただき、二〇〇五年四月、パキスタンのペシャワール基地病院を訪問しました。アフガニスタンのジャララバードにも足を運び、用水路工事の現場を見る機会に恵まれました。当時は工事が

始まって二年ほど、ようやく水が流れ始めたところで、乾いた大地に細い水の筋が走る光景を見ながら、「果たしてこの地に再び緑がよみがえるのだろうか」と半信半疑の思いを抱いたことを覚えています。けれども今、あの広大な荒地に見渡す限りの緑が戻り、作物が実り、人々の生活が息づいているのです。まさに「荒地に川を備える」という聖書の言葉（イザヤ書四三章）を思わせる光景であり、中村先生の歩まれた道は、「飢えていたときに食べさせ、のどが渇いたときに飲ませ……」（マタイ福音書二五章）という言葉を思い起こさせます。ペシャワール会の活動は、医療支援や灌



後列左から2人目が原祐一会長、前列中央中村医師、右端が村上総院長（2005年4月）

漑事業のみならず、「相互扶助」という精神の具体化です。中村先生が生涯をかけて示されたのは、言葉ではなく「行い」によって人間の善意を「具体的なたち」に変えていく生き方でした。その志は、信念に基づいた確信と、すべての人間に共通する良心への信頼から生まれたものだったと思います。

私自身も同じ西南学院中学の出身として、先生の生き方に込められた使命感を身近に感じていきます。これからもペシャワール会が人間の尊厳と希望をつなぐ架け橋であり続けるよう、微力ながら力を尽くしてまいります。

アフガニスタンの大地に蒔かれた「いのちの種」は、すでに確かな芽を出しています。どうか、その成長を末永く支えてくださいますよう、これまでと変わらぬご支援とお力添えをお願い申し上げます。